



プロフィール

藤本 政明

1953年岡山県邑久郡邑久町生まれ。

1979年鳥取大学医学部卒業。

岡山大学医学部耳鼻咽喉科助手、国立岩国病院、高松共済病院耳鼻咽喉科医長を経て、1990年より岡山大学医学部耳鼻咽喉科講師。1991年より1年間カナダトロント大学留学後、1994年より岡山市江崎に藤本耳鼻咽喉科クリニックを開業。慢性中耳炎の手術、慢性副鼻腔炎の手術経験豊富。医学博士。

耳鼻科開業医雑感

この度、岡山旭東病院より広報紙“愛”への原稿を依頼され大変光栄に思っております。私も、開業して1年半が過ぎましたので、これを機会により医者とは何か、よい診療をするには患者さんにはどういかに気を付けてもらいたいかについて最近感じていることを少し述べてみたいと思います。

先日、文芸春秋3月号に“全国有名病院ミシュラン”という記事が掲載されました。名医などはもはや幻想にすぎず、外来診療では、医師の腕の差などほとんどない。よい病院とそうでない病院との差は、病院外来で患者がいかに気分良く過ごせるかなのであるとし、採点項目として、初診予約ができる、再診の日時予約ができる、コンピューター化で、迅速に受付を済ますことができる、再診機で受付を済ますことができる、診療終了後、薬をもらうまでに並ぶ回数が二回で済む、看護婦の相談係が常時いる、病気に関するパンフレットが常時眼のつくところにおかれている、初診のみ担当する科、診療室がある、案内表示が見やすく、要所要所にある、診療科目が専門別になっている、レントゲン室が各外来から近く、わかりやすい場所にある、産婦人科の待合は個室、あるいは他の科の患者が入れないようになっている、椅子の座り心地が柔らかく、前の椅子との間隔がゆったりとしていて、長時間座っていても疲れない、前を人があまり通らない、喫煙室が個室になっているか、玄関の外にある、病院が院外薬局利用を勧めている、院内薬局の薬渡し口に待ち時間表示がされている、院内薬局に薬相談室が設けられている、洋式トイレが二分の一をしめる、温水手洗いがあある等がかかげ、東京、大阪、名古屋の三大都市とその周辺の有名総合病院をランク付けした記事です。ちなみに一位は東京大学病院、二位は日赤医療センター、三位は東海大学病院となっています。

皆さんは、この記事をどう思われますか。名医は、本当に存在しないのでしょうか。私は、やは

藤本耳鼻咽喉科クリニック 藤本 政明

り医院や病院はこのようなハード面のみでランク付けされるべきではなく、ソフト面、つまり医者の善し悪しが基本に考えられるべきだと思います。医師が常に勉強して最先端の知識をもっていること、患者の親身になって診察していることが最優先であることを忘れてはならないと思います。医師のつぎには看護婦を含めた他の医療従事者の善し悪しが来るべきでしょう。もちろんハード面にも常に気を付けて患者さんが気持ち良く診察を受けられるようにしておく必要はありますが、これのみで病院のランク付けをするのは本末転倒というものでしょう。

それでは、いい患者とはどのような患者を言うのでしょうか。昨今、患者に対する懇切な態度、丁寧でわかりやすい説明、そして最後に患者の自主的な判断へと導くというような医師の在り方が、インフォームド コンセントという外来語で表現され、脚光を浴びるようになりました。これまでは、患者さんは自分の病気を医師の治療におまかせしてきましたが、これからは、医者から得た情報をもとに自分の意志で治療を選択するというのです。これには、患者さん側も医師と対等な立場で、積極的に自分の病状を医者に伝え、また、医師から得た情報に対して自分なりの意見を言う必要があります。患者さんの身体は、患者さん自身のものですから、今自分がどういう状態なのかをできるだけ正確に医者に伝える必要があるのです。また、医者の説明に納得できなければそのことを伝える必要がある場合もあるでしょう。

実力があり患者の話をよく聞いてくれる医者、自分の病状が正確に説明でき、医師の説明に自分なりの意見がいえる患者があつてはじめてお互いが満足できる良い治療ができるのです。しかし、これらのことはなかなか一朝一夕にはできないのは当然で、このような診療を目的としながら毎日を悶々として過ごしている今日この頃です。